説教余滴、受洗の記憶　2018 年 11 月 25 日

何回でもお話しておきましょう。
1959 年 3 月、大学の初年度の終わりです。私を教会へ誘ってくれた高校の友人と一緒に山手線に乗り、大塚で降りました。彼は田端まで帰ります。帰宅後、寝る支度をしようか、という頃合に電話がかかりました。「さよなら」をしたばかりの友人からです。珍しいこともあるものです。彼はこんなことを言います。
「実は、俺洗礼を受けることに決めたんだ。牧師に話したら、持田も誘ってごらん、というんだ。どうする？」　「一緒に・・・受けよう」　「電話しておくよ」　「頼むよ」

これが受難週の水曜日のこと、日曜日は復活主日で、この日洗礼式。さすが、これは重大なこと、それを電話一本で決めていいのか、と思いました。でも決まっていたんでしょうね。その年の 1 月、彼に誘われて教会へ行き始めると間もなく、ためらうことなく、永年使用可能な皮装の聖書・讃美歌を買い求めています。60 年後の今も時々使います。

日曜日の朝、池袋で落ち合い、教会へ。牧師に会い、「よろしくお願いします。」
礼拝前に長老・役員に紹介されました。友人ともう一人若い娘さんが一緒でした。彼は、早い時期に結婚し、千葉県内に家を建て、教会から遠くなりました。私は、この友人に感謝しています。そして何時か一緒に礼拝を守ることができるように願っています。

洗礼を受けることに関しては、当人の信じます、との一言が重要です。後は神様がなさってくださる。教会の交わりの中で、生かされて行きます。
昔のメソジスト教会は、洗礼と入会は別に考えていました。洗礼は、我信ず、で十分。
その後の交わりの中で、よく観て入会へと進んだのでしょう。色々なことが頭に浮かび、錯綜してきます。この二つはいつごろ生まれ、また別々になったのでしょうか。調べる時間を見つけたいと願っています。